

スペイン語圏を知る本（その63）

濃野平 著 『情熱の階段：日本人闘牛士、たった一人の挑戦』  
（講談社 2012年）

評者 坂東 省次

スペイン南部アンダルシアの南西部に、ウエルバという人口14万の都市がある。コロンブスが最初の航海に出発した港があることで知られている。ウエルバはまた、本学名誉教授アントニオ・カバサス先生の故郷でもある。先生は本学を退職後まもなくウエルバに帰られたが、その後もかの地で日本研究を続けられ、多大な功績を残されたことは、多くの人の知ることである。

そのウエルバにいま日本人家族が住んでいる。主人の名は、濃野平。彼は世界でたった一人の日本人闘牛士である。濃野氏とは、来年出版予定の『現代スペインを知るための60章』にコラムの執筆を依頼したことからお知り合いになり、近著『情熱の階段』をお送りいただいた。真っ赤な表紙はいやがおうにも読者をひきつける。

濃野氏と闘牛との出会いは、20代の前半の頃だという。1章「夢を追って」の「旅立ち」の項目で、こう述べている。「一度きりの人生、やりたいことをやって生きて、笑って死ぬるような人生を送りたいと思っていた。何かひとつのことを夢中になって打ち込めるような生活に憧れていた。そしてある日、闘牛に出合ってしまったのだ。テレビを通してのわずかな時間、それで十分であった。闘牛というものを実際に観たことのないまま、闘牛に挑戦してみたい、とまで思いつめてしまった。」

だが、どうしてウエルバなのか。彼がスペインに到着したのは1997年の冬1月のこと、この時期、闘牛はオフシーズンである。それでも幸運なことに、ムルシアとウエルバでは闘牛が開催されており、濃野氏はムルシアで最初の闘牛見物をした後、ウエルバで2度目の闘牛見物をし、しかもウエルバで闘牛の世界に足を踏み入れるきっかけをつかんだのである。こうして闘牛士としてのデビューの日に向けて苦難の道が始まった。しかし、驚いたことに、それからわずか3年足らずで闘牛士としてデビューするの

である。彼の地の新聞『ラ・ヴォス・ウエルバ』紙は、日本人闘牛士の快挙をこう伝えている。「東洋人闘牛士は夢を成し遂げ、ノビジェロ・シン・ピカドールとしてデビューした。その勇敢さには驚かされた。反理性的ともいえる勇氣、しかしその勇敢さは疑いのないものだ。」

闘牛士としてデビューした氏の目標は、無論、日本人としては前人未踏の境地、最高位のマタドール・デ・トロスに到着することである。しかし、そのためのハードルはあまりにも高い。その第一歩として、彼にひらめいたアイデアは、闘牛場での「飛び入り」であった。しかも、彼はそれを堂々と決行したのである。『エル・ムンド』紙はこう伝えている。「この百周年記念闘牛場にはある出来事があった。東洋人による飛び入りがそれで、彼は両膝を地面についたままで牡牛を二度やりすごした。これはこの日の闘牛の中で最も見事なものであったのは疑いのないことである。」こうして彼は己の夢へと続く階段を一歩一歩昇ってゆくのである。

彼の活躍はテレビ番組『スペインの日本人闘牛士』を通して、日本の茶の間に紹介され、これがきっかけで一人の女性と知り合うようになる。彼の活躍をテレビで見て、インターネット上のホームページを通して、彼女から激励の言葉が彼に送られたのだという。出会いは恋愛に発展し、ついに結婚にゴールインする。二人の披露宴は日本国大使臨席の下で、ウエルバの闘牛場で行なわれた。この披露宴を準備の段階から手伝ったのが、カバサス先生であることを知って私はとてもうれしかった。

近年、日本では、若者が海外に行かなくなったといわれる。ましてや海外で命がけで目標達成のために奮闘する若者など皆無に等しいのではないだろうか。本書『情熱の階段』は、日本の若者に生きることへの勇氣を与えてくれる書ではないだろうか。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）